

国立天文台・天文情報センター・特別客員研究員 中桐正夫

* 東京大学星学助教授「団琢磨」について (東京天文台 100周年記念誌資料)

アーカイブ室新聞第353号(2010年6月21日)「東京天文台100周年記念誌作成時の資料—その3—」のリストの中に

30. 佐藤利男氏から広瀬さんに送られた男爵団琢磨伝上(昭和13年)のコピーというものがある。この実際のものを手にしてみると、佐藤氏の手紙のあて名は斉藤先生(斉藤国治)宛になっている(写真1)。

1979.6.10.
斉藤先生
佐藤利男
7日のお電話で申し上げた「団琢磨伝上」のコピーです。東京天文台100周年には団の名は出て来ませんが、吉田光邦著「日本科学史」(講談社出版)の280ページには、ボールと共に団琢磨が出て来ます。
麻布のブドウの皮、これから実験関係とでもと調うべて、早くも保存したいものと思っております。

写真1 佐藤利男氏の手紙

佐藤利男氏は明治期の天文学史を研究されている在野の方で、斉藤国治氏と懇意にされていた。斉藤国治氏が日本天文学会理事長をされていた時、筆者が庶務理事をしていたこともあり、佐藤利男氏と話す機会が多くなった。この手紙は1979年6月に書かれたもので、東京天文台100周年は1978年であったから、すでに100周年記念誌は発行された後のことで、記念誌には団琢磨の名は出てこないと書かれている。この手紙のそえられた資料が「男爵団琢磨伝上」の第15章「東京大学助教授」コピーである。

団琢磨は、東京大学助教授として東京天文台が東京大学天象台と言っていた頃、星学を担当したことがあるのである。

アーカイブ室新聞第361号(2010年7月12日)に「寺尾寿に東京大学を追われ、三井財閥の総帥になった団琢磨」という記事で、この資料を基にした記事はすでに書かれているが、その資料を掲載しておきたい。この資料では教授、講師、助教授(奏)、助教授(判)、准講師、准助教授という序列で出て来るとも興味深い。助教授(奏)というのは「奏任助教授」のことで、助教授(判)は「判任官助教授」のことであろう。また、「第3学年において赤道儀の観測及び移算、分光鏡及び光線計の使用、卯酉儀の緯度測定をシャープナーの著書を参考にし」という記述があり、筆者が卯酉儀と呼ばれた望遠鏡を使っていたこともあり、非常に興味深いのである。

第十五章 東京大學助教

大坂専門學校助教としての大坂時代三年間は、君にとりて必ずしも愉快なる月日ではなかつた。よし歸朝早々君の心を痛めた就職難は、それによりて免かるを得、物質的には寧ろ恵まれた生活を續けたのであつたが、何分にも其職務は英語を主とする一教師に過ぎなかつた。當時我國に於て極めて稀なるパチエラー、オヴサイエンスの學士號を有する嶺山學専門家の職務としては誠に相應しからざるものであつた。加之専門學校が廢せられて中學校となつては君は長く此に留まるの意が無く、東京に歸りたき意思が頗る切になつた。かくて奇しき運命は君を東京大學に轉任せしめ、又しても君が専門ならざる星學の講座に關係せしめた。

明治十四、五年度東京大學法理文學部一覽を繕いた人は、其理學部職員奏任助教授の中に君の氏名を見出すであらう。而かも君が姓名の上に記された擔任授業科目は探鑛學又は冶金學にあらずして、星學とあるを見ては果して此れが

第十五章 東京大學助教

一三二

第十五章 東京大學助教

一三二

五十年前の君であるかを先づ疑ふであらう。

美術品蒐集の爲屢々下阪して君の宅に宿泊した東京大學御雇教師ホールは星學の講座を擔任して居たが、明治十四年九月星學科は理學部に於て一獨立専攻科に陞格し、彼れは同大學卒業の寺尾壽が明治十二年に海外に派遣せられて未だ歸朝せざれば其間助手にも當るべき者を物色しつゝあつた。一日彼は君に對して助教授として東京大學に轉任の意志なきやと問ふた。君は其擔任すべき科目星學が君の専攻學科にあらざる旨を答へたに對し、彼は君に期待する業務が單に天文臺に於て星座を觀測して時刻を定むる極めて易々たることで、少しく豫め口授解説すれば容易の業たる旨を告げて切に轉任を懇願する所があつた。理學部長菊池大麓亦君の就任を承諾したので、茲に君も東京に轉任する決心を固めた。かくて明治十四年十月君は東京大學奏任助教授に任命せられた。

そもそも東京大學は明治十年四月東京開成學校東京醫學校を合併し、新に法理文學の四學部を以て構成せられ、又東京英語學校を東京大學豫備門と改稱し

て此れに附屬せしめたもので、明治十四年君が赴任した當時は総理として加藤弘之総理補豫備門主幹として服部一三在職し、理學部には部長菊池大麓の下に左記の教授助教授及講師が夫々頭書の講義を擔任して居た。

教授

土木工學 ウィンフィールド・エスタチアリン (合衆國)

英吉利語 ウィリアム・エー・ホートン (合衆國)

英吉利語

外山正一 (靜岡)

純正及應用數學

菊池大麓 (東京)

植物學

矢田部良吉 (靜岡)

探鑛學、冶金學

クルト・ネットー (獨逸)

機械工學

ジェームス・アルフレッド・ニューウキング (英國)

試金術、吹管分析術、獨乙語

岩佐巖 (東京)

物理學

山川健次郎 (青森)

星學

ヘンリー・エム・ホール (合衆國)

第十五章 東京大學助教

一三三

第十五章 東京大學助教

一三三

物理學

平岡盛三郎 (山口)

製造化學

ゴットフリー・ワグネル (獨逸)

植物學

伊藤圭介 (愛知)

生理學

永松東海 (長崎)

分析化學有機化學

松井直吉 (岐阜)

地質學、金石學、古生物學

カール・ゴツチエ (獨逸)

講師

金石學

和田維四郎 (滋賀)

數學

古市公威 (兵庫)

造管學、機械圖學

小島憲之 (東京)

分析化學無機化學

櫻井錠二 (石川)

動物學

箕作佳吉 (岡山)

助教 (奏)

佛蘭西語

古賀護太郎 (長崎)

機械工学
星學

助教授(判)

關谷清景(岐阜)
園琢磨(東京)

探鑛學、冶金學
數學、重學
化學
土木工學
氣象臺觀測方
地質學
畫學
氣象臺觀測方
化學

准講師

理學士 渡邊 渡(東京)
理學士 大森俊次(山梨)
理學士 中澤岩太(石川)
理學士 石藤豊太(廣島)
理學士 野尻武助(東京)
理學士 信谷定爾(東京)
理學士 西松二郎(長崎)
理學士 多賀章人(東京)
理學士 桐山篤三郎(長崎)
理學士 織田順三郎(静岡)

羅甸語
數學
動物學

准助教授

理學士 神田乃武(東京)
理學士 三輪桓一郎(東京)
理學士 佐々木忠二郎(福井)

君の關係せる星學科に於ては、その第一學年學生は單に星學大意なるものを理學部一般學生と共に聽講し、第二學年以上に至つて星學及關係科目を左記時間割によつて履修するのであつた。

星學理論	3	3	3
星學實驗	3	3	3
純正數學	9	9	5
物理學	6	6	0
重學	4	0	0
應用數學	0	4	5

英吉利語 2 2 0 0
獨乙語 2 2 0 0

右の科目中星學實驗の指導は實に君の職務でこの實驗を課せらるるものは、數學科第二學年物理學科第四學年星學科第二三四年生であつた。物理學界の碩學藤澤利喜太郎、田中館愛橋等が君を先生と呼んだのはこれが爲である。其専攻生たる星學科學生の實驗は、第二學年級に於て子午儀天頂儀、紀限儀の運用時間及緯度の測定、水平尺及分微尺の用法を實習し、參考書としてはルミヌス及シヤウプネーの著書を用ひ、第三學年級に於て赤道儀の觀測及移算、分光鏡及光線計の使用、卯酉儀の緯度測定をシヤウプネーの著書に參考し、第四學年級に於て子午儀の觀測及移算、子午圈恒差の測定をヘッセル、シヤウプネーの著書によつて行つて居る。此の觀測所は當時觀象臺と呼ばれて明治十一年九月に本郷元富士町に建設せられて居たものであつたが、明治十五年二月に至つて天象臺と氣象臺との二つに分れたものである。

當時の學生にして後年迄君と交渉を持つた學生は物理學科藤澤利喜太郎、中正平、田中館愛橋、長岡半太郎、探鑛冶金科野呂景義、松田武一郎、山田直矢、山田文太郎等で、當時の星學科學生は四學年を通じてただ第四學年級に限本有尙あるのみであつた。

然し東京大學助教授に就任した事情は前に述べた行き懸りであつた爲、直接講義に携はる譯でもなかつた。従つて當時學生であつた藤澤利喜太郎、田中館愛橋、長岡半太郎の追憶を綜合すると、此等學生は舊色の洋服を着た此助教授と友達半分に打ち解けて親しく天體觀測の製圖などしたことは深く印象付けられて居る。

當時君は、獨身の氣樂き直ちに東京大學内天象臺側の宿直部屋に落付いたが、君の主なる職務は夜間に天體の觀測をなすにあつた爲、日没の頃より五番館に隣れる天象臺に移つて居た。曇天を幸ひ番町の金子邸を訪れた折など俄かに月明となり、或は群星上空に現れたる折には急ぎ天象臺に歸ることもあつた。かくて翌朝天象臺より歸宅して一度就寝し其後計算に没頭して居た。

君は東京大學助教授時代に於てその職務とせる天體の觀測以外に、地震學に

第十五章 東京大學助教授

一三五

第十五章 東京大學助教授

一三七

一三八

興味を有して研究を進め地震に關する論文を發表して居る(附録參照)。又同郷の友人原恒太郎を談り、科學書の翻譯を企て君が邦語に口譯するを原は邦文に綴つて居た。惜哉今は其原書名等を知る由がない。

君の天象臺の生活が四年目を迎へた明治十七年の春、豫て星學專攻の爲佛國に留學せる寺尾壽が歸國の期は近づいたし、大學にても教職員の整理を必要として居た爲、君は己が進退を考慮せなければならなくなつた。寺尾は君と郷里を同じくせる福岡の出身で莫逆の友であつたが後年遠慮なく諧謔的に談つた言葉に「自分は團君の恩人である。何故となれば今日君が斯程の榮達を爲したのは、云はば自分が君を大學より追出したからである。あの折僅かな情を以て大學に留めて居たならば、君は恐らく今日の榮達處か、低き地位に一生を送つたであらう」と。かくて君は君の上司であつた文部少輔九鬼隆一の斡旋によつて工部省に其地位を得た。

この項の最後のページに寺尾壽が團琢磨を大學から追い出したから、三井財閥の総帥にまで榮達したと書かれ、團の恩人であるという記述がある。

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp